

そのシンデレラストーリー、
謹んでご辞退申し上げます2

【登場人物紹介】

サイラス・
アクシアン

アクシアン公爵家の長男で、頭脳明晰な絶世の美男子。
アルテシオに途な恋心を抱いており、
困い込み外堀を埋め、アルテシオを自分のものにしたい。

セラフ・
ルーク

ネルド公国からの留学生。
普段は暗い色のローブを着て前髪で顔を隠し、
目立たないようにしているが……？

ライ・
ナナル

ハーシエル国からの国費留学生で、
アルテシオの同級生。
明るい性格のコミュ強。

アルテシオ・
リモーヴ

没落寸前の貧乏子爵家の次男だったが、
親友サイラスの怒涛の猛アタックに絆されて、
彼の婚約者となる。
学園を卒業し、サイラスとともに
アカデミーに進学した。

エラド・
リン

ネルド公国からの留学生で、セラフの従兄。
ネルド公国で薬医大学を
早期卒業しているインテリ。

Character



目次

そのシンデレラストory、謹んでご辞退申し上げます2

7

番外編 従兄弟の婚約者を寝取ったら、
とあるルートに突入したのだが

289

そのシンデレラストory、
謹んでご辞退申し上げます2

一本だけ残された蝋燭の明かりが、白かったシーツを暖かな色に染めている。

仄暗い部屋の中、見慣れているはずの景色が妙に艶めかしく見えるのは、きっと今夜が特別な夜だからだ。

……つまり、初夜である。

「アル、どれだけこの夜を待ちわびたことか」

そう言いながらサイラスは、俺の体をそっとベッドに押し倒した。唇が柔らかく重ねられ、隙間から振じ込まれたサイラスの舌が、俺の舌を捉える。

逃げ場のない口内で、舌同士がもつれ合う。敏感な器官への愛撫に、性感が刺激されていく。

誰かさんのおかげで俺の体はすっかり快感に正直になった。

サイラスの唇が首や鎖骨を這い、指が胸の突起を弄り始めると、我慢を知らない俺のペニスは、はしたなくガウンを持ち上げる。それに気づいたサイラスが、裾に手を差し入れて俺のものを握った。

「あッ！」

「アルと私の可愛い息子は、今夜も元氣いっぱいだ」

そんなことを嬉しそうに言いながら、ゆるゆるとソレを抜くサイラス。

それは俺だけに付いている俺のムスコなんだが？　なんてシラケることは、もちろん言わない。今の俺がすべきなのは、ただサイラスにしがみついてその愛撫を享受することだけだ。

サイラスの手が、緩急をつけてソレを擦る。長い指が俺の先端からあふれた先走りに濡れている。それがいやらしすぎるし、目眩がするほど気持ちいい。

薄暗い空間に、俺の荒い息遣いと、濡れた手でペニスを抜く水音が響く。

ふと、俺を追い立てるサイラスの手の動きが緩やかになった。

(なんで……)

もつと擦ってほしいのに、いいところで中断されたくない。

困惑気味にサイラスを見ると、彼は俺の両脚を割り開き、股間に顔を埋めていた。

「……っ」

熱い吐息が際どい場所にかかり、柔らかな金糸の髪に鼠径部を擦られた。一際皮膚の薄いところを、熱くザラついた舌が這う。そのまま滑るようにペニスを啞え込まれてしゃぶられた。

絶え間なく襲ってくる甘い刺激。俺の唇は快感にこじ開けられて、情けない喘ぎ声を漏らすしかない。

「ん……ふっ」

唾液にぬめる舌が狭い口内で蠢く。淫らに響く濡れた音が鼓膜を震わせると、ペニスはどんどん

硬くなっていく。以前なら恥ずかしくて逃げ腰になっていたが、今ではその先にある快感に期待するようになった。それもこれも、サイラスが俺の体を、こんなにも浅ましくしたせいだ。彼がいつも優しく、俺の体を蕩かせるから……

「あ、だめ、イク……」

断続的な刺激にもう耐えられない、と腹の筋肉がびくびく震える。快感を溜め込んで重く張った陰嚢は、サイラスの左手に包まれながら解放の瞬間を待っている。

(もうダメだ、これ以上は……)

俺の限界が近いのを察したのか、サイラスの口淫が激しくなった。唾液に濡れた唇で扱かれて堪らなくなった俺は、彼の頭を両手で抱え込み、熱い口の中で精を放った。突き抜けるような快感に体が仰け反る。

「あ、ああああ……んっ！」

射精したばかりのペニスを吸引されて、思い切り足の筋が引き攣る。強烈な追い討ちをかけられて腰が抜けそう。快感に脳髓までも焼き尽くされて、真っ白になる。

サイラスの愛撫は、どうしてこんなに気持ちいいのか。初めて組み敷かれたあの日もすごいと思っただけ、時を重ねてさらに上達していると思うのは、決して欲目なんかじゃない。俺なんかがいつまで経っても受け身のままで、翻弄されて悶えているばかりだというのに。

しかしもちろん、達した余韻に浸って終わり、ではなかった。

サイラスの熱い手が、まだ息も整わない俺の双丘をねっとり撫でる。

「あ……」

「本当に、すべすべで滑らかで、吸い付くような肌だ」

「普通の……男の肌だろう」

「ふふ、自分のことには無頓着な君らしい」

言いながら手を滑らせた彼の指が、俺の奥の窄まりに触れた。

そこはビクビクと怯えながらも健気に彼の指に吸い付き、中に招き入れようとするまでに成長した。

サイラスは、しばらく指先で円を描くようにそこを撫でていた。

こそばゆいような感覚をじっと耐える。すると今度は、ぬるりと熱いものが触れた。サイラスの舌だ。ベロリと窄まりを舐め、ぴちゃぴちゃと湿った音を立てる。

「や、ああっ!? あー!」

気持ちいい。粘膜同士の接触、気持ちよすぎる。

でも、綺麗なサイラスの口が俺の尻に触れている光景は、何度見ても慣れない。されている側なのに、よくわからない罪悪感を覚えてしまう。

というか、どうしてサイラスは、そんなことまでできるんだ。

そんな俺の葛藤なんか知る由もないサイラスは、絶好調で俺のアナルを舐め解している。舌先を突っ込んで出し入れし、ふやけたとみるや、そこに指を差し入れる。

それはもう、楽しそうに。

さっきの射精で頂垂れていた俺のペニスはまだ頭をもたげ、それを見たサイラスは唇の端を上げた。

「すっかりここで感じるようになったね。嬉しいよ」

「君が……毎晩弄るから、だる……っ」

息も絶え絶えに答える俺に、サイラスが唾を飲む音が聞こえた。

「清らかで何も知らなかった君が、こんなに美味しそうに私の指に吸い付くようになるなんて。これなら……」

挿入できると言いたいのだろう。

俺だってそれは同じだった。

夜毎に与えられる快感を享受しながらも、最後の一線を守る君がもどかしくて歯痒くて、堪らなかった。あとどれくらい待てばと、その日を心待ちにしてきたのだ。

サイラスは指を一本ずつ増やし、抜き差しに無理がないかを確認する。二本、三本、四本。そして、それらよりも少し太い張形。サイラスの馬並みを受け入れるためには、慎重に慎重を期さねばならない。

そしてようやく、その待ちわびた瞬間が訪れた。

「ようやく、君と一つになれるんだね」

「そうだな、サイラス。俺のココは君のおかげで準備万端だ。ドンと来い」

「アル。君って人は、こんな時にも雄々しく、そして愛らしい」

雄々しさと愛らしさははたして共存できるのだろうかという疑念は、この際置いておく。

俺はドキドキと心臓を高鳴らせながら、サイラスの馬並みペニスを熱い眼差しで見つめた。

わかってたことだけど、改めて見るとでっ……か。とんでもないな。こんな綺麗な顔の下にこんな凶器がぶら下がってるなんて、誰が思うよ。俺だって最初見た時は衝撃で気絶したくらいだし、一時は死を覚悟したものだ。

でも今はもう大丈夫。子兎のように震えていた俺はもういない。だってめちゃくちゃトレーニングしたからな。

(とうとうアレが、俺の尻に……)

なんだろう、この高揚感。俺は今から処女を喪うのか……

あ、いや、待てよ？ もう指は散々挿れられてるから、厳密には処女じゃない、のか？ というか、男の尻でも処女でいいのか？

妙な疑問に気を取られている間に、トロトロに抜げられたそこには、大きく熱い塊が宛がわれていた。濡れた亀頭をぐりぐりと押しつけられ、俺のアナルが武者震いしている。

「んっ……」

うん、大丈夫。ちゃんと気持ちいい。数多の訓練を耐え抜いてきた俺のアナルだ。大丈夫、きつとやれる。

ドキドキしながら、その瞬間を待つ。

サイラスが気合を入れるように息を吸い、ゆつくりと体を前に進め始める。巨大なペニスの先端

が、満を持して俺の中に挿入^{はい}して……
その瞬間、鋭い痛みが俺を襲った。

「っ!？」

(え、嘘、なんで?)

予期せぬ事態に、パニックになる。おかしい。さつきは指四本でも平気だったのに、こんな先っちょが入っただけで痛くなるはずがないだろ？

(落ち着け、俺。指には慣れてても本物は初めてだから、緊張して違和感を覚えて痛い気がしてるのかもしれん。少し待てば、きっと……)

とはいえこの感じだと、挿入^{はい}しているのはまだほんのわずか。慣れるまでにどれくらいかかるんだと絶望する。しかし、この日を待ち望んでいたサイラスをガツカリさせたくない。

(これからだ。緊張が解ればきっと緩む。あれだけ頑張って特訓したんだから。ファイトだ、俺!)

これから来る痛みを耐えるべく、俺は己を鼓舞した。しかし……

——ブチッ。

サイラスが動いた途端、嫌な音と共に襲いかかった激痛に、俺は悶えながら叫んだ。

「こんな時、ホーンの秘薬さえあれば!!」



「——ル! アル!」

「はっ!？」

名前を呼ばれて目が覚めた。開けた視界いっぱい、慌てたような表情のサイラスが映る。どうやら俺は、彼に起こされたらしい。

「どうしたんだ、アル」

「え、は、いや……あれ?」

「随分覺^{えな}されていた。怖い夢でも見ていたのか?」

「あ、いや……」

心配顔のサイラスに問われながら、俺は呆然としていた。

起き抜けは意識がはっきりしておらず、状況把握に時間がかかる。なんだろう。なんだかすごい夢見てた気がするんだけど、今はなんともないな。

(ええと、なんの夢を見てたんだっけ……)

思い出そうとするのに、サイラスが体のあちこちを確認するように触りたくてくるので、気が散って思い出せない。というか、どさくさに紛れて朝から変などこまで触るんじゃないよ、君は。

俺はサイラスの手首を掴み、ゆっくりと押し戻しながら言った。

「すまん、大丈夫だ。別にどこも痛くない」

「本当に?」

「うん」

「ならいいが……。てっきり、私がどこか痛くしてしまったのかと」

「君が、痛く……？」

そう言われて、さっきまで見ていた夢が一気に蘇った。夢の中で迎えていたサイラスとの甘い初夜（前半）と、その無惨な失敗による絶望が……

（なんて夢を見てしまったんだ……）

あそこまでいきながら挿入を遂行できないなんて、不吉すぎないか。まさか正夢じゃなかるうな。夢の中の出来事とはいえ、俺の尻穴、不甲斐ない。サイラス、あのあとガツカリしたろうな。なんかごめん、夢だけだ。

夢の中のサイラスに申し訳なく思っていると、現実のサイラスが言いにくそうに口を開いた。

「アル、あまり寝かせてあげられなくて悪いんだけど、そろそろ起きる時間だ。さっきレイアードとメイドが湯を運んでくれたから、湯浴みをしておいで」

「……レイアード？ あ、そうか……」

サイラスの言葉で、ようやく俺はすべてを思い出した。

そうだ、俺たちは昨日、卒業式のあとにリモージュ家に帰ってきた。そしてパーティーが終わってから、そのまま泊まったんだ。

俺の部屋の様子を見に行ったら、なぜかサイラスが変に興奮しちゃったんだよな。それで宿泊用の客間に戻ってから、しつこくアレコレされてしまった。実家だから気まずいしやめようって散々

言ったのに、結局何時間も鳴かされて、寝落ちたのはたぶん明け方近くだったんじゃないか。

この体の怠さから推測するに、せいぜい寝たのは一、二時間くらいだろ。すんごい重いもん。

それにしても、やけにリアルな夢だった。

そう思いながら、ちらりと横にいるサイラスを見る。

あんな夢を見たのはたぶん、昨夜のパーティーで、兄上の友人だというカルロ・アガッティとサイラスの会話を聞いてしまったせいだ。兄上に紹介してもらったあと二人はかなり盛り上がりつついて、最終的にずっと欲しがっていた例のホーンの秘薬をアガッティ商会が取り扱うことになったと聞いたサイラスが目を輝かせていた。

俺はといえば、その横で笑顔を保ったままドン引きしているだけだった。

例の秘薬というのは、遙か東の閉ざされた謎の国・ホーンで作られる薬だ。男性同士で睦み合う用に作られたそれは、長期間使うことで受け入れる側の穴を広げられるとかなんとか。

鎖国中の国とも取り引きできるパイプを持っているアガッティ商会、ちよつと怖いなと思うし、その秘薬が俺の体に使われるのかと思うと、今から気が重い。

怪しい。怪しすぎるぞ、ホーンの秘薬。本当に信用できるのか……

（……いや）

考えればあふれ出してしまう疑念を、首を振って否定する。

もう腹を括ったはずだ。俺の体に負担をかけたくないと、高価な薬を手に入れてくれるサイラスの気遣い、ありがたいじゃないか。俺にできるのは、彼の気持ちに応えられるようにベストを尽く

すことだけ。さつき見た夢のような失敗をしないために。

決意を新たに、ぐっと拳を握る。すると、そんな俺の耳にサイラスが口を寄せて囁いた。

「どうした？」

「いや、なんでも」

まさか初夜を失敗しないように意気込んでいたとは言えず、俺は曖昧な笑みでかぶりを振る。

「ほんとに？ 昨夜は無理をさせてしまったからな。辛いなら抱き上げて湯浴みをさせようか？」

今の君の体、私の体液だらけだから責任持つて綺麗にするよ」

「……」

俺は無言の微笑みでそれを拒否して、ベッドから降りた。そして、呆気にとられているサイラスを尻目に部屋の隅のバスタブへ向かうと、勢いよく仕切りのカーテンを引いた。

「えっ、アル？」

「大丈夫だ。君はもう湯を使ったのか？」

「あ、ああ」

「そうか。なら、少しだけ待っていてくれ」

「わかった」

困惑気味に返事をするサイラスをほんの少し可哀想に思ったが、頭を振ってその感情を追い出す。朝っぱらからそんなことされたらまたとんでもない目に遭うわい。

カーテンで仕切られたコーナーにはバスタブがあり、中には半分ほどの湯が張られていた。それ

を横目に、用意されていた合金製の水差しからポウルに湯を注いで驚いた。

前にずっと使ってた古い真鍮製のやつより、遙かに軽くて使いやすい。以前の真鍮製は重くて使い辛かったので、これは嬉しかった。ちなみにアクション家の本邸には陶製と銀製があるのだが、俺は圧倒的に陶器派だ。取り扱いには気を使うけれど、軽いのだ。

そんなことを考えながら、湯に浸した布で首元や脇の下、腕を拭う。それから石鹸を使い、手早く体を洗った。これから両親や兄妹と同席しなきゃならない朝食の席に、妙な匂いをさせたままで向かうわけにはいかない。ただでさえ、夜中の音が気になって気まずいものだから。

泡を湯で流したあと、体を拭く用にと用意されていた布を手にとった。……なんだか妙にフワフワして柔らかい。

「なんだ、これ……？」

俺の知っている布とは違う、未知の感触だった。肌触りの良さに思わず感嘆が漏れる。とりあえず濡れた顔を拭いてみた。

信じられない。いつもの布なんか目じゃない吸水力だ。俺の動揺がカーテン越しに伝わったのか、サイラスが問いかけてきた。

「アル？ どうかした？」

「あ、いや」

「入浴終わったんだよな？ はい、ガウン」

「ありがとう」

サイラスはカーテンの隙間から遠慮がちに白いガウンを手渡してくる。礼を言いながら受け取ってそれを纏った俺は、またしても驚いた。体を拭いた布と同じ感触。なんじゃこりゃ。これは絶対に超高級品だろう。こんなの本邸でも使ったことがない。

カーテンを開けてサイラスの前に出た俺は、かなり怪訝な顔をしていたらしい。「どうしたんだ？」

心配そうな顔をしたサイラスにそう聞かれ、俺は布とガウンを指差した。

「いや、これ……」

「ああ、それ」

「君も用意する時使ったんだろう？ これ、知ってるのか？」

「実はね……」

すでにその正体を知っていたらしいサイラスの口から語られたのは、実に興味深い話だった。

どうやらその未知のふわふわ布は、かのホーンの製品で、フォルというらしい。またホーンか。妖しげな秘薬の話で穿った目をしがちだが、本来ホーンという国は、魔術・工業技術に長けた国として有名だ。そしてその一方で、潤沢で良質な水資源を擁し、水の国とも呼ばれている。なんでも、どんな家にも安全で清浄な水が引かれていて自由に使えるらしい。

ゆえに風呂という文化が発展しており、風呂関連用品が非常に発達しているという。

このフォルはそんなホーンが長年研究して生み出した最新作なのだとか。一応鎖国中なのだが、最近なぜか我が国に友好的らしい。本当に掴みどころのない、摩訶不思議な国なのである。

「フォル……」

感触を確かめるように握りながら呟く俺に、サイラスは口を開いた。

「実は、私のところにも売り込みがあった。ほら、昨夜会った義兄上のご友人」
噂をすればなんとやらだな。

「ああ、カルロどのか」

「そう、そのカルロ・アガッティイの。会頭には会ったことはあるけど、彼に代わって国外に出向いていたご息子とお会いしたのは昨夜が初めてだった」

「そうだったのか」

サイラスはこくりと頷いた。

「このところのアガッティイ商会の伸び代はすごいだろう？ それが切れ者の後継者の功績だと知れば、今の内に繋がっておこうと考えるのはウチだけではないはずだよ。しかしまさか、その後継者どのが義兄上のご友人だったとはね。人の縁とは面白いものだ」

その言葉に、俺も頷く。たしかに面白い縁だ。

「まあそれで、昨日はいろいろ有意義な話も聞けたし、いくつか有益な取引もできた」

「妙薬を大量に買った以外にも、何か頼んだのか？」

首を傾げた俺に、サイラスは胸を反らして得意気に言った。

「このフォルだよ。先日、アクシアンの屋敷でアガッティイの担当者から勧められた時は、アクシアンに導入するには在庫数が少なすぎて断念するしかなかった。だからせめてもと、納品数の少ない

リモージュ邸の分だけ納品させたんだ」

「えっ、そうだったのか。初耳だ」

「リモージュ邸の改装関係については、アルの耳に入れないようにしてたからね。びっくりさせたかったんだ」

「君って奴は……」

照れたように笑うサイラスを見て、ジーンと胸が熱くなる。一日一回はスパダリムープでときめかせてくるの、やめてほしい。

「ん、でまあ、それでアクシアンへの導入を諦めてただけど、昨夜カルロどのが、ホーンの有名フォル工房と直接取り引きを決めてきたというじゃないか」

「え。と、いうことは……?」

「うん。アクシアンでもそう遠くない未来にこれが使えるようになるよ」

「そうなのか! でかしたぞ、サイラス!」

「えへへ」

俺は嬉しさのあまり、サイラスに抱きついた。毎日このふわふわで顔や体を拭ける日々が来るなんて、素晴らしすぎる。

アクシアンの財力に乾杯!

いらないうちでいるのに無理矢理着替えを手伝ってくるサイラスと、一人でさっさと着替えた

い俺。そんな不毛なせめぎ合いを経て、ようやく身支度が整った。

それを見計らったように、メイドが朝食に呼びに来た。

一階の食堂に下りた俺とサイラスは、すでに揃っていたリモージュの家族と朝食のテーブルについてた。そこには父母と兄、それに昨日は眠いと言ってさっさと部屋に引っ込んだ妹・シエラもちゃんと座っている。

これまで妹のことについてはあまり触れなかったが、別に兄妹仲が悪いわけではない。例の王宮での断罪舞踏会にも、パートナーとして付き合ってくれた。

ただこのシエラ、幼い頃から驚くほどに無口なのである。素直な良い子で、喜怒哀楽もちゃんと表情には出すが、とにかく口数が少ない。

とはいえ引っ込み思案というわけでもなく、気の合う友人はそれなりにいるようだ。人の観察をするのが好きだったり、かと思えば急に何か書き物を始めたりと、謎の行動はあるものの、まあ、良い子なのである。

で、そのシエラが、先ほどから並んで座るサイラスと俺をじーっと交互に見ながら、パンを齧っている。見目の良いサイラスが観察対象になるのは仕方ないが、俺にまで意味ありげな視線を向けるのはやめてほしい。自分と同じ顔を見て何が楽しいんだい、妹よ。

と、ここで本日のリモージュ子爵家の朝食を紹介しよう。

アクシアン家の本邸や東ネールの屋敷で出るような白いパンや主食用のパンケーキ、主菜にはベーコン、ウサギ肉や鴨肉の使われた料理が数品、それと我が家では定番の野菜たっぷりカブのポ

タージュ。

一見普通の朝食に見えるだろうが、これは従来のリモーヴァ家からすると、お客様仕様の食事である。

まず、パン。

今でこそ俺はアクシアン家の本邸の食事に慣れ、柔らかな白いパンを食するのが普通になっているが、実家に住んでいた頃は三百六十五日、食卓に上るのは茶色か黒っぽい色の硬いパンだった。品数だって朝からこんなに並んだことはない。

スープだって、こんな色とりどりの綺麗に切られた野菜じゃなくて、屑野菜と細切れベーコンを入れたようなものを、朝も晩も飲んでた。ただ、それはいつでも温かかった。

普通、貴族の食事は食卓に並ぶまでに冷めてしまっていることが多く、本邸でもごたぶんにもれずだ。だが、農民に毛が生えたような暮らしぶりかつ屋敷も小さく、台所から食堂が激近のリモーヴァ家では、毎回温かい食事が出てきた。温かいスープというのは、たとえ中身が貧相でも、それだけで贅沢なものだと俺は思う。

どれだけ大きく荘厳な屋敷に住んでいても、冷たい食事は美味しさを半減させてしまう。アクシアンの屋敷に移って残念なのは、唯一そこだけだ。

その点、東ネールの屋敷は良かった。アットホームな規模だったからか、毎回温かい食事が出てきたからだ。

まあ、日々の食事ができるというのはそれだけで感謝すべきことなので、食事の温冷などで文句

など言う気はないけどな……

とりあえず今は、久々の味を堪能するでしょう。

湯気の立つスープをスプーンで掬すくい、冷ましながら口に運ぶ。

(うん、美味い)

懐かしい味に、思わず頬が緩んだ。

横の席に座って優雅にスープを口に運んだサイラスも、「おお、これは美味しい」とびっくりしたように呟つぶやいている。

そうだろう、そうだろう。

高位貴族であるサイラスの前に供するには相応ふさわしくないとわれそうだが、豪華な食材を使っているも冷めて肉の油が固まって浮いたスープより、断然こっちのほうが美味いに決まっている。

「アル、これはさぞかし名のある料理なんだろうね」

なんて感心しきりでコソツと言ってきたサイラスに、「ただのカブのポタージュだ」と返すと、また驚いていた。

大袈裟な奴だなと思いつつパンをちぎっていて、ふと部屋のことを思い出し、母に聞いてみた。

「母上、俺の部屋の改装はしないんですか？」

昨夜入ってみた俺の部屋は、数ヶ月前に出た時と何も変わっていなかった。埃ほこりも積もらず、物の一つも動かしした形跡がない。

廊下や周りの部屋は軒並み改装しているのに、どうしてなのかと不思議だった。

しかし母はこともなげにこう返してきた。

「だって、部屋の主に聞かない内に手を入れるわけにはいかないでしょう」

なるほど、常に相手を尊重する母らしい答えだ。なので俺は、肩を竦めて答えた。

「綺麗にして客間にでも使っていたらいいですよ」

「いいの？ あのまま残しておかなくて」

「もちろん。あの部屋だけをそのままにしておくのも不自然ですし」

「あなたがそう言ってくれるのなら、そうさせてもらおうかしら」

幼い頃から十年以上を過ごし、苦業の詰まった部屋が消えてしまうのは、物寂しくはある。あの部屋が綺麗に改装され客間にでもなったら、もうこの家に俺の帰る場所がなくなってしまう気がして。

だが、それでいいんだろう。すべては変わっていくものだ。

俺はすでにサイラスと婚約し、この家を出た。アクシアン公爵令息の伴侶としてアクシアン家に入り、数年後には広大な屋敷の統括者とならなければいけない。俺のようなヒョ子子がそれを成し遂げるには、帰る家などないくらいに覚悟を持つべきだ。

その後、朝食の時間は和やかなまま終了した。

俺は帰る前にもう一度自室を訪れた。そして、朝の陽射しに明るく照らされた部屋を隅々まで眺め、目に焼き付けた。

気が済むと、サイラスと共にアクシアン家の馬車に乗り、家族や使用人たちに見送られながら、

リモーヴの屋敷を後にした。今年の麦の刈り入れを手伝えないことに、少し後ろ髪を引かれる。

子どもの頃からこれまでの、多くの感情と思いの詰まった部屋と決別したその日。

俺の少年時代は終わりを告げたのだった。



改めまして、俺の名はアルテシオ・リモーヴ。リモーヴ子爵家という、しがたない没落貴族の家に生を受けた、平凡面の次男坊である。

貧乏貴族の息子が将来身を立てるには学問を磨くしかないと考えて、猛勉強の末、貴族の子女が通うグロワール学園の特待生枠を勝ち取った。そこで、のちに親友となるサイラスと出会った。

その頃サイラスには、超浮気性の婚約者、エリス嬢がいた。彼女の度重なる醜聞に悩まされていたサイラスは、将来的な婚約破棄を視野に入れ、彼女の浮気の証拠集めに余念がなかった。

そして、つい数ヶ月前。

若い貴族たちを招いて催された王宮の舞踏会で、エリス嬢と、サイラスの従兄弟であるシユラバーツ殿下の不貞関係が公になる出来事が起きた。掟破りの、婚約者以外の相手とのファーストダンスである。

当然ながら、サイラスは二人に激昂。その場でエリス嬢に婚約破棄を叩きつけた。

場の流れを味方につけたことと、サイラスの伯父である国王陛下の公正なる裁定により、サイラ

スは見事に彼女との婚約破棄に成功。

エリス嬢と彼女の生家であるタウナー伯爵家は地位を失い、シュラバーツ殿下も『他人の婚約者を略奪し騒ぎの原因を作った』として、北の塔という王族専用の隔離施設での謹慎を言い渡された。そこまでは、良かったのだが……

なんとサイラスは、婚約破棄をした途端、なぜか俺にプロポーズをしてきたのだ！

まずかったのは、俺がすっかりそれを受けてしまったこと。

我に返り、なんとかして婚約を断ろうとしたのだが、そのたびに俺より上手なサイラスにまんまと丸め込まれてしまう。しかも、サイラスお気に入りの別邸である東ネールの屋敷に快適に軟禁され、快楽による物理攻撃と財力による籠絡で、とうとう正式に婚約を了承させられてしまった。

しかしそんな時、北の塔から脱走したシュラバーツ殿下が、逃走中に魔物により命を落としたりという報せを受けた。

葬儀に参列し殿下を見送ったあとの婚約式の日には、なんとシュラバーツ殿下の乳兄弟ちきょうだいだったジュール先輩に拉致され、貞操と命の危機に陥ってしまった。

颯爽と現れたサイラスに救出されたり、アクシアンあきしあんの屋敷でサイラスの小間使いの美少年にいびられたり、学園を卒業したりといういろいろあったが、なんとか今に至る、というわけだ。



学園を卒業してから、俺はやにわに忙しくなった。

アカデミー入学までの期間、暇でゴロゴロできると思うだろうか？

まあ普通はバカンスに行ったり、学業から解放されて街へ遊びに繰り出したり、中には卒業してしまっただけという事実にも、数日は無気力にゴロゴロしたりする者もいるだろう。

だがしかし、俺はそのどれにも当てはまらない。

思い出してみてもほしい。俺が、結婚前の身だということ。

アカデミーに入学してしまっただけは纏まった時間が取れなくなるから、結婚式の準備の大半をこの短い休暇の間に済ませなければいけないのだ。ついこの間、婚約式を済ませたばかりだというのに。

派手さを望まない俺や家族に配慮して、「結婚式は東ネールの屋敷で、内々にやらないか？」と提案してくれたサイラスの気持ちは、とても嬉しかった。

しかし、我が国随一の公爵家の嫡男であり、次期アクシアン公爵となるサイラスの結婚式。

それを、俺のためだけに小規模で済ませるわけにはいかんだと主張したことで、結婚式はそれ相応の規模で執り行われることとなった。

相変わらず気はすすまない。すすまないが、すべてを俺仕様俺仕様にして貴族の付き合いを疎かにするのは、アクシアンにとって良くない気がした。

ともあれそうなれば、招待客は王家に次ぐ規模になる。

両家の親族をはじめとして、交流のある貴族たち、お世話になった教授や友人知人などの学園関係者、アクシアン家の姻戚関係には隣国や周辺国の王侯貴族もいて、どの辺まで招待客に入れるべ

きか、なんてふるい分けも必要になつてくる。

その点で言うと、リモーヴ子爵家は没落直後から周囲にそっぽを向かれています。親戚らしい親戚との交流なんて残ってなくて気楽なもんだ……なんて思っていたら、最近『遠縁の○○家でございますが』『お爺様の代にお付き合ひのありました○○家の者ですが』なんて手紙が頻繁に届くようになった。

しかも、アクシアン家の本邸にいる俺のところだけじゃなく、実家にも来ていますらしい。俺があのアクシアン公爵家に嫁ぐことが知れ渡って、どうにか縁を繋ごうと必死なんだろうか。ただ父に言わせれば、窮していた時にそれらのどの家からも手を差し伸べられた記憶はないという。

まあ、つまりはそういうことなんだろう。面倒なので見なかつたことにした。

そんなこんなで、招待客リスト作成だけでもそれなりの日数を要するのだが、それと並行して衣装も仕立ててもらわないといけない。

女性のようにドレスに贅を凝らすわけではなくとも、特別な衣装でなければならぬから、数人のデザイナーにデザイン案を競わせる。高位貴族の結婚式衣装は、無名のデザイナーでも一躍名を馳せるチャンスだし、すでに売れっ子ならば一段と受注が増えるだろう。

ということ、現在手元には山のようなデザイン案がある。

うん、どれも素晴らしい。

しかし、婚約式の衣装の時も思ったのだが、着る人間の片方は俺だからな？ サイラスならどんな華美な衣装だつてすんなり着こなすだろうが、俺はそうはいかないぞ？ 舐めるなよ？ もう少

し地味顔にも優しいデザインをお願いします。

それから、結婚指輪。

婚約指輪は東ネールの屋敷に拉致軟禁されていた時にもらった、あのサイラス特注の青い貴石を嵌め込んだ指輪だ。今回も同じアクシアン公爵家御用達の宝石商に頼んでいるのだが、石はさらに高ランクの希少石になるという。

サイラスの話では、婚約指輪に使われている石より、さらに透明度とランクが高くなるらしい。ということは、絶対にお値段も上がるわけ……

おそらくその指輪は、結婚式後にはクローゼットの奥深くに仕舞うことになるだろう。だつて身に着けるの怖すぎる。

それに日常使いたと、シンプルで引かかる心配のないデザインの婚約指輪のほうが着けておきやすい。というか、これが薬指に馴染んでしまっているんだよな。……別に惚気ではないから。

とまあそんなこんなで、休暇とは名ばかりの多忙な日々を送っていたある日のこと。その日俺は、アクシアン家本邸の執事ロイスを助手にして、屋敷に届いた手紙の仕分けをしていた。

これは本来なら、サイラスの母君であり屋敷の女主人でもある公妃様の仕事である。

しかし、生来体の弱い公妃様は空気の良い領地の屋敷で静養されている。公妃様が不在時にはロイスがその役割を受け持っていたというが、婚約式の翌日から俺に引き継がれた。

よって、今はロイスに指導を仰ぎつつ、仕分けを行っている真つ最中なのだ。それをしながら、

アクシアンと繋がりのある多くの貴族家を覚えていく、というわけ。

最近では俺宛てにも、婚約祝いの手紙や品が多く届き、受け取るべきか否かの選別もしないといけない。

例の『有名になるといきなり増える親類縁者』からの場合もあるから、それは見なかったことにするとして……。他の送り主たちには、目録と共にお礼状を出さなければならぬ。

あとは、貴族からのパーティーの招待状や、茶会の招待状なんてのもある。

パーティーはともかく、茶会といった令嬢たちの集いに呼ばれても困るんだが。どうせ、どうして男のお前がサイラスの相手なんだとチクチクやるつもりだろう？ 却下だ却下。パーティーの招待状のほうは、おそらくサイラスに出してもけんもほろろだからと、俺宛てにしてるのかもな。元下位貴族の俺なら御しやすいと思われているんだろう。

要するに、舐められている。

……はあ。貴族、めんどくさいなあ……

しかし、やらねばならない。これが、俺のこれからのライフワークなのだから。

ロイスと共に二時間ばかりかけて選別作業を終え、やっと終わったと息を吐く。疲れを隠せない俺に、ロイスが劳いの言葉をかけてくれた。

「お疲れ様でございました。お茶でもお淹れいたしましょうか」

「ありがとう、頼むよ」

俺が頷くと、ロイスは一礼して部屋を出ていった。

いやもう本当に疲れた。文字ばかり見てたから目がしばしばするし、ずっと俯いた姿勢だったからか、首も肩も痛い。

椅子から立ち上がって肩をぐるぐる回していると、突然勢いよく扉が開いた。

びっくりして視線を向ける。まあ、誰が犯人かはわかっているのだが、それでも驚くものは驚くのだ。

「アル！」

「サイラスか」

入ってきたのは、やはりサイラスだった。そしてその顔には、満面の笑み。

……なぜか嫌な予感がするのは気のせいかな。

「アル、吉報だ！ 素晴らしいものが手に入ったぞ！ さっそく今夜から試そう！」

「藪から棒に、なんだ？」

サイラスは右手に拳大の紫色のガラスの容器を持ち、俺に見せつけるようにブンブン振りながら足早に近寄ってきた。何それ。香水？

「これから毎晩使っていけば、初夜には十分間に合うぞ！」

「しよ、初夜？」

初夜と聞いて、脳裏にあの嫌な夢の記憶が蘇る。

サイラスは俺の前までくると、ガバツと抱きついた。相変わらずいい匂い……じゃなくて！

「どういふことだ？」

わけがわからん。首を傾げる俺に、サイラスは声を弾ませた。

「以前に頼んでおいた品がついさつき届いたんだ！ ほら見てくれ、これがあのホーンの秘薬だぞ！」

はたと思い出す。すっかり忘れてた。例のアレかい。

「カルロどのに聞いただろう？ どんな巨大なモノでも受け入れられるようなあの部分を掘げ、決して傷つけることなく極上の快薬を得られるという、あの魔術大国ホーンが誇る性の秘薬だ！」

「あー、うん……そんな宣伝文句謳ってたっけ……」

アガッティ商会が発注を受けた時点で、実在するのはわかっただけ……そうか。どうとうサイラスの手に渡ってしまったか。複雑だ。

きゅつと唇を引き結んだ俺に対し、サイラスはウッキウキで破顔している。眩しい。

「どれだけ金を積んでも本来なら入手できないと言われていたから、ほとんど諦めていたんだが、私には特別に便宜を図ってくれると言ってくれてな。カルロどの噂に違わぬ商売上手だ、ははは！」

「ヘエー、ソーナンダー」

つまり、今夜からそれを使つての特訓が始まるってこと？

気が遠くなりそうなんだが。

そもそも本当に信用できるのか、それは。あの悪夢が正夢になるフラグじゃなからうな？

というか、ホーン。なんでもアリなのか、あの国は。

特別ってなんだよ。鎖国するなら徹底的にしるよな……



秋になり、俺とサイラスは予定通り、アンリストリア王立アカデミーに入学した。

アカデミーは我が国の最高学府であり、国内外の優秀な学生たちがよりレベルの高い学びを求めて集う、世界有数の名門教育機関でもある。

そんなアカデミーと学園との違いは、入学してすぐに感じた。

まず、学内を歩いている学生たちの容姿や肌の色、服装などが多種多様なのだ。見たこともない衣装に身を包んだ学生を、想定していたよりも多く見かける。

先ほども言った通り、アカデミーは国外から優秀な留学生を多く受け入れている。なので当然と言えば当然なのだが、実際に目の当たりにすると、物見高い田舎者のように驚いてしまう。

外国人を見たことがないわけではないが、これだけの人種が一堂に会しているのを見るのは初めてだ。王族の結婚式なんかに招かれる機会があったら、外国からの貴賓も目にしたらだろうが、ご存じの通りウチはそんな招待状がくるような家ではなかった。

しかし王家と縁深い公爵家なら、ウチとは違うかもしれない。そう思つてサイラスに聞いてみたのだが、意外にも彼は首を横に振った。

「いや、王家の関連行事だつてこれほどじゃないよ。そもそも私がこの歳になるまでにあつた王族

の結婚式なんて、ごく幼い頃にあった王太子殿下のものくらいだったし」

「ふうん、そんなものか」

相槌を打ちながら、横を歩くサイラスをちらりと見る。学園より桁違いの規模で建てられた校舎の中、隣を歩く彼は学園を卒業した時よりもまた一段と大人びていて、やはりここでもすれ違う学生たちの目を釘付けにしている。

アカデミーもほぼ男ばつかなのにな……

いや、人並み外れた美しさというものは、性別など関係なく人を魅了してしまうんだろう。わかる。俺もそれで絆たされてしまったし……いや、違う。俺が絆たされたのはサイラスの真摯な想いであって、顔の造作などでは……。自分で自分に言い訳をする俺の横で、サイラスは顎下に右手を当てて言葉を続ける。

「しかもまだ子供だったから記憶も朧おぼろげだよ」

その朧おぼろげだという記憶を辿たどっているのだろうか。サイラスはさらに続けた。

「第二王子殿下はお体が弱くていらつしゃるという理由でご結婚を見送られているし、第三王子殿下は先日、友好国であるスーレスに王婿おうせとして出られたから……」

「そうだったな」

そして、第四王子殿下であるシユラバーツ様は、亡くなられた。

あの寂しい葬儀の日を思い出して、俺はほんの少しだけしんみりとした。

と、その時。

「あれは……」

サイラスが前方を見ながら立ち止まり呟いた。端正な横顔の視線の先を追うと、そこには見慣れぬ衣服を着た学生が二人、話しながらこちらへ歩いてくるのが見えた。

見慣れない藍色の長い衣に、象牙色の肌。どちらも黒髪で、彫りが深いとは言えない、なんとうか……あつさりした顔立ち。親近感が湧くのは気のせいか、なんて考えてたら、サイラスが先にそれを口にした。

「……なんだか彼らの雰囲気、どことなくアルに似てるね」

「え、そ、そうか？」

「うん。なんというか、顔立ちとか肌質とか」

「……肌質」

「色白なんだけど、白さの種類が少し違うというのかな」

心外……というより妙に納得してしまった。

実は、母方の何代か前に異国の方がいたと聞いたことがある。母方の祖父母は亡くなっているの、それがどこの国の人なのかはつきりとは知らないが。

もしかしたらあの留学生たちは、俺のご先祖様の国か、近い国に住んでいるのかもしれないな。

そう思ったら、俄然興味が湧いてきた。

「どこの国からの留学生なんだろうな？」

二人を目で追いながら言うと、サイラスは少し考え込むようにしてから、小声で答えた。

「あの装束の特徴は、おそらくホーンのものじゃないだろうか」
「えっ、あれがホーン人!？」

またしても？ 絶賛鎖国中なのに話題沸騰中だなホーン。

サイラスの言葉に驚いて大声を上げそうになって、とっさに右手で口を覆う。

そんな俺とサイラスに気づいた二人組が立ち止まってこちらに視線を向け、美しい所作でお辞儀をしてきた。俺たちがそれに会釈で応えると、彼らは微かに笑みを浮かべ、静かにその場を去った。彼らの後ろ姿を、俺は不思議な気持ちで見送る。

——だから、気づかなかった。

廊下の遥か向こう、突き当たりを曲がったそのホーン人学生二人が、ひっそりところを窺いながら話していたことに。

『あの金髪のほうが、白鹿の方様の血縁者か』

『思ったより似ておりませんね』

『そうだな。それに、あれは我が君のお好みではないな。白鹿の方様のほうは、すんなりとなよかで美しいというのに』

『……相変わらずすげえですね。不敬ですよ』

『貴様、告げ口するなよ』

『はあ、いちいちそんな真似はいたしませんよ。しかし、白鹿の方様といい、あの金髪といい、見ていると目がチカチカしますね。その点、隣の茶髪の方は目に優しく、なぜか安心感があり

ます』

『そういえばそうだな。異国人のはずなのに、妙に親しみが湧くというか……』

そんな会話をしている二人が、まさかあの人に繋がっていたことなど、観察されていることにすら気づけない俺には知る由もないのだった。



アカデミーの敷地は広い。そりやもう、学園とは段違いに広い。

国内だけでなく世界各国から学生を受け入れているのだから、当然学生の数も学園の数十倍だ。

多くの学生たちの学び舎となる講義棟がいくつも立ち並び、図書館はなんと三棟もある。それぞれ置いてある蔵書の種類が違わらしく、学生は必要に応じて使い分けているという。

食堂もやはり三つあり、店舗によって料理のラインナップが違う。故郷を離れて暮らす留学生たちへの配慮として、それぞれの店が様々な国の料理をメニューに盛り込んでいるのだ。ちなみに食堂以外にもカフェが数店舗あり、広い芝生の庭を見渡しながら茶を飲めたりする。

文具やちょっとした日用品の買い物ができる店もあって、わざわざアカデミーの敷地外へ出なくても、大概のことなら完結してしまう。

さながら、ちよつとした街のようだ。

それから、まだ実際に確認しに行ったことはないのだが、講義棟の集まる場所から西側と南側方

面に少し行くと、留学生用の寮が立ち並んでいるらしい。

「ひとくちに寮といってもいくつか種類があつてね？ 学生の経済状況によって入れる寮が違うんだ。例えば、平民だけど実家が小金持ちの僕は独立コテージを借りてるけど、ごく普通の国費留学生のライは一般寮で慎ましく暮らしてる、とかね」

「慎ましいは余計だろ。一般寮だつて設備は良くて清潔だし、広さだつて十分だ」

「そうだ、アルテシオ君。今度僕の部屋に遊びにおいでよ！ なんなら泊まってくれても構わないよ」

「なあ、聞いて？」

掛け合いのような会話でそう教えてくれたのは、最近親しくなつた留学生のセラフ先輩と、同じく留学生のライだ。

俺は現在、三つの内の一つ、第一食堂でランチの真つ最中である。

状況を説明すると、俺の右隣に最近ご機嫌斜め気味のサイラスがいて、長テーブルを挟んで真正面にはニコニコ顔のセラフ先輩が座っている。その向かつて右側には先ほどのライがいて、左側にはセラフ先輩と同郷のエラド先輩が無表情で黙々と食事をしていた。

セラフ先輩とはとある事故をきっかけに知り合い、一歳年上だけど同級生のライとは、入学時のオリエンテーションで紹介されていた交流サークルで知り合った。

セラフ先輩とエラド先輩は共にネルド公国からの留学生で、従兄弟同士らしい。二人とも褐色の

肌に見えて、セラフ先輩は眼鏡の奥にうつすら青灰色の瞳、エラド先輩は金色にも見える琥珀色の目をしていて、かなり顔立ちが整っている。

セラフ先輩は前髪で目を隠してるから鼻から下しかまともに見えないけれど、見えてるパーツはやはり整っている。平民でも裕福な家の息子らしいのに、服装はなぜかいつも野暮ったい灰色や黒っぽいローブ姿ばかり。俺が言うのもなんだが、全体的に地味で惜しい。

で、ライのほうはといえば、こちらはハーシエル国からの留学生で、白い肌に明るい茶髪、緑色の目をしている。俺より歳上だとは思えないほど可愛らしい顔と明るい雰囲気、すんごいコミュ強。

セラフ先輩たちとは対照的な印象を受けるのに仲は悪くなさそうなのも、ライが人懐っこいからかもしれない。

ともあれ、俺もライを見習って交友関係を広げていかなければ。何せ俺には、このアカデミーであらゆる国との人脈を築くという目標があるんだからな。

王族の血を色濃く引き、かつ優秀なサイラスは、将来この国の要職に就く。そしてそれはきつと、義父である公爵様の職である、外務卿だろう。

外務卿といえば、外交交渉が主な仕事。諸外国の代表者との交流も必須だ。

アンリストリア王立アカデミーに留学を許される学生たち、特に国費留学生は、卒業して帰国すれば自国の官僚の道に進む者がほとんどだ。つまり、高確率で国家の運営に携わることになる。

もし俺がそんな彼らと友人になり、将来にわたる交流を持てたとしたら、いつかサイラスの力に

なれる日が来るかもしれない。

そう思いながら、目の前の皿からラスネをフォークに刺して、ひと口齧る。途端、嗅いだことのない独特の匂いが口内から鼻腔に突き抜けた。

……なんだ、この個性的な香り。ものすごく刺激的な匂いとお味だ。スパイスなんだろうが、これって人間が体内に入れて大丈夫なやつ？

このラスネは、ネルド公国の名物料理らしい。肉なのに鮮やかな緑色、つとどこに不安を覚えてたら、案の定それが的中。実家にいた頃欠伸あくびをしたら口に入ってきた小虫を知らずに嘔み潰してしまった時と同じ味がする……

セラフ先輩が「美味しいから食べてみて！絶対に損はさせないから！」とかしつこく勧めてるからオーダーしてみたけど、一口目から早速損した。絶許ぜつじゆ。

しかし、一度口に入れたものを吐き出すなんて行儀の悪いことはできない。

涙目になって横のサイラスを見ると、「アル、なんだか見たことのない顔してるぞ。大丈夫か？」と心配されてしまった。

心配ついにか、手にしたナプキンで口元を拭いてくれる。ご機嫌斜めでも優しさは変わらないんだよな。好きだ。

気遣わしげに眉根を寄せる綺麗な顔にうつとりしていたら、向かいから擲擧からかうような声が飛んできた。

「えっ？嘘、無理そ？」

そちらを向くと、してやったり顔でニヤニヤするセラフ先輩と目が合った。

「……先輩？まさかわざと俺を嵌めた？」

「そんなことないよ。ラスネはネルドの伝統食で、僕とエラドは好物だもん。それにしてもアルテシオ君は、麗しき婚約者殿にお世話焼かれて幸せでちゅね」

イラッとしたので、無言のまま睨んでやった。

セラフ先輩との出会いは、かれこれ十日ほど前のことだ。

あの日、サイラスが急遽きゅうじゆ公爵様から呼び出され、午前中の講義が終わると急いで早退した。俺にしてみれば、突如降って湧いたひとりの時間。正直言って、すぐウキウキした。

というのも、サイラスの婚約者になりアクシアン家に入ってからというもの、俺たちは四六時中行動を共にしていた。そりゃまあ、トイレや風呂なんかで短時間離れることはあるが。

婚約式の日の誘拐事件以来、サイラスの過保護にはさらに輪がかかってしまった。それだけ、あの件はサイラスにトラウマを与えたんだろう。

早退していく時も、「絶対に護衛の目の届く範囲にいること。すべての授業が終わったら、速やかに帰宅すること」と口酸っぱく言われたくらいだ。

今やサイラスだけでなく俺にも専用の護衛が付けられているのに、過剰に心配しすぎだ。

学内の治安は良いので、護衛は内部には入らない。今のところ彼らの仕事は、俺たちがアクシアン家の本邸とアカデミーを往復する道中だけに限られている。

そんな中で、俺が久々のおひとり様時間を得て浮かれてしまったのは、仕方ないことだと思う。俺は言われた通り、授業が終わるとすぐに帰りの馬車に乗った。

しかし同時に、こう思った。

——今度いつこんな機会が訪れるかわからない。なのに馬鹿正直に本邸に戻るだけなんて、つまらなすぎるだろう。

サイラスと一緒にいる毎日に不満はない。

だが、せっかくひとりなのだから……いや、厳密に言えば御者も護衛の乗った馬車もついてきているんだが、それでもいつもとは違う。

(せっかくだから、いつも馬車の中から見えるあの本屋に寄ってみたいなあ)

俺はそんな軽い気持ちで、御者に馬車を停めるよう言いつけた。

ほんの十分だけ、初めて入る本屋の中で束の間つかの自由を味わう。そして数冊の本を買ったら、すぐに馬車に戻る。

本当に、それだけのつもりだった。



いつもはアカデミーへの行き帰りに前を通り過ぎるだけだったその本屋は、馬車通り沿いにあるにしては古くこぢんまりとして、正直あまり人目を惹くような外観ではない。

だがある種の人間は堪らなくそられてしまう、そんな店だった。

渋味のある色合いのドアノブを引くと、頭上でカランカランと呼び鈴が鳴り、店の奥に客の来店を知らせた。店は思いの外奥行きがあり、まだ午後の三時を過ぎたばかりだというのに、通路は薄暗い。ところが書棚の並ぶメインエリアに着くと、各棚の上部にカンテラが掛けられていて、きちんと明るかった。

(へえ、経費がかかってそうだなあ)

見かけによらず、儲かっているのだろうか？　なんて失礼なことを思ってから、いや店の構造的に仕方ないのかもしれない、と考え直す。店奥に向かう廊下部分も左右の建物に囲まれているから、窓からの明かりが期待できないだろう。

それでこの状態か。つまり、営業時間中は絶え間なく燃料を消費する……

まあでも仕方ない。それを承知でここで本屋を始めたんだろうし、暗くて文字や内容が確認できなければ、誰も本を買わない。

(それにしても、なかなかシビアな営業形態でやっているな。店主はよほどの変わり者か、金のある道楽者?)

なんて思いながら、俺は書棚の一つの前に立って、そしてすぐに目を見開いた。

そこには、ごく最近刊行されたばかりの人気の新書から、学園やアカデミーの図書館、東ネールの屋敷にも本邸の蔵書にも見られないような古典の稀覯本きこうほんまでもが並んでいたのだ。

その隣の棚には、はるか昔に禁書となって名前しか残っていないと聞いたはずの本がしれっと

ある。

大丈夫なのか、これは……

(すごい……いつかは読みたいと探していた本が、こんなに)

ワクワクだ。ここはワクワクの詰まった宝島だ。

ふわふわ浮き立ち、俺は足取り軽く店内を回った。

あまり長くはいられないから、時間をかけて厳選することはできない。

これだけの宝の山を目にしていながら！と惜しい気持ちはあったが、それでもその中からいくつかは持ち帰れるのだからと自分に言い聞かせた。

その成果を見せて、興味深い本屋だったとサイラスに教えてやれば、俺と趣味の被ってる彼だって喜ぶかも。そうしたら次は一緒に来られるだろうし、万が一彼が気に入らなくなったら、俺が立ち寄りたいたいと言えば聞いてはくれるだろう。

まあその前に、まっすぐ帰宅しなかったことに少し嫌味を言われるかもしれないが……

それはそれとして、とにかく今は連れ帰る本選びだ。

俺は目の前の棚から気になったタイトルの本を手にとって冒頭を数行読み、中のページをパラパラと捲ってから小脇に抱えた。何度かそれを繰り返し、そろそろ十分経つかという頃には、七、八冊ほど抱えていた。

異国の祭礼に関する物珍しい本や、幼い頃に友人宅で読んだ、古の勇者の冒険譚……のその後の、闇墮ち物語。これたしか、俺泣いた記憶あるわ。

魔王を倒して平和な世界が来たのに、元勇者は平穏な日々の中では自分が能無しになったような気がして追い詰められ魂が蝕まれていく。この際次の魔王になるかと魔界に向かったら、そこはすでに次期魔王が誕生してた。

強さの全盛期を過ぎてた元勇者はその若い次期魔王にあっけなく負けて、しかも妙に気に入られて手籠めにされちゃうんだよな。たくさんの魔物たちの前で「私の魔王妃だ」って宣言されて絶望するシーンがほんと不憫すぎて泣いたんだっけ。一度は世界を救ったのに、そりゃないだろ。不思議と他人事とは思えない。

それから、当代世界の七不思議に、人気の推理小説家の最新作も見つけた。

あと、なんだかよくわからない外国語で文字は読めないが、植物の絵がやたらと緻密に描かれていてめちゃくちゃ古そうな薬用植物図鑑的な本、などなど。

一貫性はないがバラエティに富むラインナップで、俺はもうホックホクだった。

(名残惜しいが、今日のところはこれくらいにしといてやるか)

選んだ本をもう一度確認して、やっぱりどれも外せないと心を決めた。

会計をするために、気難しそうなおじいちゃん店主の座っているカウンターのそれらを運ぶ。

本を一度にこんなにも買うなんて初めてだ。ほんの数ヶ月前までは、一冊買うにもいろいろとやり繰りを考えるくらいに貧しかったから。

しかしアクシアン家の嫁となることが内定している今の俺には、毎月少くないお小遣いが支給されている。しかし貧しき育ちゆえか、一度にこんなにも金を使うことに少し後ろめたさもある。で

もそれを打ち消してしまうほどの高揚感があった。

好きなものを好きな時に買えるって、すごい。これもサイラスと、アクシアン公爵家の潤沢な財のおかげだ。ありがとう、ございます、ありがとうございます、金持ちバンザイ!

購入した本を包んでもらって店を出ると、店前で中年の御者が待っていた。彼は頭を下げると、俺が大事そうに抱いている荷物を見て、両手を差し出した。

「お運びいたします」

「ありがとう、でも大丈夫だ」

「しかし、少し距離がありますし」

「距離？」

そう言われて目をやると、たしかに馬車は、さつき降ろしてもらった店前から二メートルほど前方に移動していた。そして、その数メートル後ろに護衛馬車が停まっているのが見えた。

「……いや、十歩もないじゃないか。いいよ別に」

「しかし、サイラス様が……」

「彼はこんなことで叱ったりはしないよ。そもそも君は御者なんだし」

「はあ、わかりました。しかし重かったらいつでもおっしゃってください」

そう言っ、御者は心配そうな表情で俺を見つめた。

いや俺、本の数冊も持てないくらい情弱系令息だと思われているの？ まさかな？ 鍬を振るいま

くつてきたこの俺の上腕二頭筋、見せつけてやろうか？ おん??

しかし、悪気のない御者にそんな言葉を吐けるわけもないので、俺はにつこりと笑みを浮かべるだけにしておいた。

「ああ、ありがとう」

気持ちは嬉しいが、今の俺は、自分で買ったこの本の重みを味わっていた。それも読書前の**趣味**なのだから。

そうして、御者と共に馬車に向かつて歩き始めた、次の瞬間。

なぜか俺は、石畳に転がっていた。それも一人ではなく、どこからか現れた人物と二人で。

「おふっ！」

「あ、アルテシオ様っ!?!」

「すっ、すまない! いやすみません!! うわほんとごめんなさい!!」

「……うう」

ぶつかられた脇腹と、石畳に強かに打ち付けた尻の痺れに、俺は声もなく悶絶する。手から滑り落ちて重い音を立てる本の包み。その横で頭を押さえながら謝罪を連発している、眼鏡にモツサリした黒髪の若い男。

その姿には、どこか見覚えがあった。

一剣に手をかけながら走ってくる護衛騎士二人が目端に入り、俺はそこに手のひらを向けて制した。

眼鏡の男の様子から、おそらくこれは故意ではなく、ただの事故だと判断したからだ。

「本当に申し訳ない！ 変な奴に追われて逃げていたらつい。お詫びはのちほど、幾重にも」
そう謝罪を繰り返しながらも背後の路地を気にする男を見ていて、俺はついに思い出した。
(この人、アカデミーの学生だ)

たしか学内で二、三度見かけたことがある。
褐色の肌に、黒髪。前髪が眼鏡を覆うほど伸びているせいで、眼鏡の視力矯正の意味を考えさせられてしまうほど。

そして極め付きは、その顔立ちから留学生だとはわかるものの、どこの出身なのかの想像を拒むような無個性な暗色のローブ。

普通なら、服装には多少なりともお国柄が出るものだと思うのだが、その留学生はまったくわからず、その異質さが少しだけ気になっていた。

見る時は決まって、広い図書館の一番奥の閲覧席に一人で座っていた。そういうところも記憶に残っていた一因だったかもしれない。

とはいえ話したことがあったわけではないので、思い出すまでに時間を要してしまった。

「失礼ですが、アカデミーの学生では？」

そう聞くと、前髪眼鏡君は驚いたように目を瞠みはった。

「あれ、僕をご存じですか？」

「よく第二図書館にいらっしやいますよね」

「なぜそれを……ということとは、あなたもアカデミーの学生？」

「はい」

やっぱりビンゴだった。

しかし、その図書館で見たアカデミー生がなぜ、こんな街中で人と衝突事故を起こすほど一心不乱に逃げているのか。

気になって口を開こうとした時、彼が出てきた路地の奥で人影が揺れるのが見えた。

(あれは追っ手か?)

俺は痛みをおして立ち上がり、本の包みを拾う。それから彼の手を掴んで立たせ、そのまま馬車まで連れて行き、御者が開けた扉の中に押し込んだ。

次いで自分も乗り込むと、「とりあえず出してくれ」と御者に言い、急いで扉を閉めた。

向かいの座席に座った前髪眼鏡君は困惑した様子で、おずおずと口を開いた。

「あの、これは……」

「乗りかかった船ですし、お送りしますよ。ご自宅は？」

「へ？」

「あそこで放って帰っても後味が悪いですから。それで、どちらまで？」

キョトンとしていた彼は、それでようやく俺の行動の意図が理解できたようだ。目に見えて雰囲気
気が和らいだ。

変な奴に追われていると言っていた。こんな地味で弱そうな学生が追われる理由なんてきつとろくな理由じゃないだろう。

ならば俺にできるのは、その追ってくるろくでもない奴からこの人を逃がすことだけだ。護衛騎士に対処してもらってもいいのだが、そうするとサイラスに報告されたあとがめんどくさい。

よって、速やかにその場から離れるのが最善の策である。内心で言い訳をしながら向かいに座った前髪眼鏡君に目をやると、彼は走り出した馬車の窓からしきりに外を見て、何かを気にしているようだった。

「どうしました？」

声をかけると、彼は一瞬ハツとしたように何か言いかけたが、すぐにそれを呑み込むように口を閉じた。そして口元だけで微笑んで、「あ、いえ。じゃ、じゃあ、アカデミーの南門までお願いできますか」と口にした。

その後、彼を送り届ける道中で少しだけ事情を聞くことができた。

彼の名はセラフ・ルーク。

ネルド公国からの留学生で、アカデミーの二年。俺の一年先輩だった。

貴族ではないが、実家は裕福な古美術商。一緒に留学してきた従兄弟と共に、アカデミー敷地内の南エリアにある寮に住んでいるとのこと。しかも奇遇にも、先ほどの本屋の常連なのだという。

えっ、この人ももしかして俺と趣味近い？ と、親近感が湧いた。

で、黒髪眼鏡君——もとい、セラフ先輩は、先ほどもそこへ向かうために散歩がてら街に出てきたのだが、運悪く三人組の悪そうな連中に絡まれてしまったらしい。

仕方がないので財布を差し出して逃がしてもらおうとしたのだが、何が気に入らないのか、どう

せなら殴らせると追ってきたのだという。

そんなことある？ 金を取り上げた上に暴力まで振るおうとするなんて、どんな鬼畜だよ。

やつぱり騎士たちにとつ捕まえてもらって、バチボコに鉄拳制裁をお願いすべきだったかな。でもそうした場合、トラブル後の半ばセクハラなサイラスチェックがねちっこくてめんどくさい。まあ、彼がねちっこいのは今に始まったことじゃないが……

「性質の悪い連中がいるもんですね」

憤慨しながら俺がそう言うと、セラフ先輩は「どうしてだか、こういうのがちよいちよいあるんですよ。いつもは上手く躲かしてるんですけどねえ」と、また口元だけで笑った。

いや、実は満面の笑みなのかもしれないが、眼鏡と長い前髪が邪魔してしまい表情が見えないんだよ。なぜにそんな不自由な前髪をしているんだろうか、この先輩は。視界や歩行に問題しかなさそうなんだが？ 変な輩やに目をつけられるって、原因はもしかやそれなのでは？

しかし、他人の出で立ちに物言いをつけるのもなんなので、黙っておいた。モサモサして見ていて暑苦しいが、本人がそういうファッションが趣味なら、余計なお世話だろう。

それに話した感じ、言葉遣いも綺麗で声のトーンも落ち着いていて、どこことなく品が良い。しかも、アンリストラ語もかなり流暢りゅうちやうに話している。

格好はともかく、さすがはアカデミー生というべきか……

なんて感心している間に、馬車はアカデミー南門の前に到着した。

留学生の住む寮のあるエリアに外部から出入りできるのは、この南門と西門だけだ。ちなみに、